は、摂論系統の師によって述作されたものと観察することが妥当のようである。

製作の年代については、懐感の「群疑論」の教学と比較するときは、前のようである。また「称讃浄土経」を引用するに際して、新訳の語を用いていることから考察すると、此の経の翻訳（永徽元年・六五〇）後、程近い時期である初唐時代に製作せられたものと推定せられる。しかし著者については、今の処は不明である。

唯識にたいする反駁と応答

安　井　広　済

世親の「唯識二十論」の初めに、唯識説にたいする次のような反駁がある。

若識無実境　則処時決定
相続不決定　作用不応成

この反駁は、若しかりに、すべてが唯識であり、われわれの認識するところに、実際の対象（実境）がないならば、①対象が一定の場所に決定して存在すること、②対象が一定の時間に決定して存在すること、③対象が一個人の意識の流れに決定されずに存在すること、④対象が作用をなすこと、以上の四つが成立しない、という反駁である。したがって、この反駁は、われわれの日常世俗の経験的な認識の事実にもとずいて、対象の客観的実在性を主張する反駁であるといってよい。われわれの常識的な経験的認識によるかぎり、すべては、われわれの心から顕現した単なる観念的存在でなく、①われわれの心から独立した一定の場所に存在し、②一定の時間性をもっており、③その存在は主観的な個人的存在でなく万人の認める普遍的な存在であり、④現実的な作用をもっている。われわれの経験的認識によるかぎり、対象が心の顕現にすぎないという唯識の立場は、いかにしても承認されない。対象は、われわれが認識すると否とにかかわらず、われわれの認識に先立って存在する客観的な存在であり、われわれの認識は決して対象をうみいだすが如きものではない。唯識にたいする右の反駁は、このような、われわれの日常の経験的認識の立場からなされている反駁と認められる。したがって、右の反駁は、経験的な認識の立場にたって、対象の客観的実在性を主張する実在論者よりの反駁である。だから、この場合、唯識説は実在論にたいする観念論とみなされているわけでさる。

しかし、唯識説は実在論にたいする単なる主観的な観念論というべきものではない。右の反駁にたいし、世親は次のように応答している。

処時定如夢　身不定如鬼
同見膿河等　如夢損有用

この世親の応答は、すべてが唯識であっても、①②対象が一定の場所と時間に存在することは、あたかも、夢におけるが如くに、成立し、③対象が一個人の意識の流れに決定されずに存在することは、あたかも、多くの餓鬼が同じく膿の河を見るが

如くに成立し、④対象が作用をなすことは、あたかも、夢における損害に作用がある如くに成立する、という応答である。

したがって、右の世親の応答によるかぎり、唯識説は実在論者に反駁されるような単なる主観的な観念論とは明らかに異なっている。なんとなれば、世親は対象を心のあらわれとする唯識という主観的な観念論的立場をとっているが、しかし、世親の唯識の立場においては、＜対象が一定の場所や時間に存在し、一個人の主観的な意識の流れに決定されずに存在し、現実的な作用をもつ＞という、対象の客観的な実在性が認められているからである。世親の唯識の立場は、唯識という立場をとる点で実在論ではないが、だからといって、実在論にたいする観念論でもないような、いわば、主観的な観念論と客観的な実在論との二つの意味をもつ如き立場であって、対象を心の思いのままにあらわしだすというような、都合のよい主観的な唯心論ではない。世親の唯識の立場は、われわれの心のあらわすところのものが、われわれの心から独立した客観的な実在性をもち、逆に、われわれに働きかけるという如き意味をもった立場であって、むしろ、きわめて都合の悪い唯心論というべきである。世親の唯識説は、われわれが自己のつくったものに逆に動かされ悩まされる自業自得の姿を教えるものであり、ここに主観的な観念論と全く異なっているのである。世親の唯識説は、われわれの苦悩の現実の実相を自覚せしめんとする教えである。唯識が夢の喩えによって説明されるのは、ここに理由があると考えられる。

観世音菩薩と無量寿経

芳岡良音

観世音菩薩は光讃般若経等の多数の初期大乗経典に現れて居り、大乗仏教成立の当初から知られていた菩薩で諸厄解除をその信仰の主眼とするものであったことが、初期無量寿経（大正蔵一二 308 b）華厳経入法界品（同九 718 b）法華経（同九 128 c）思益梵天所問経（同一五 48 b）の文によって明かである。観音の原語は Avalokitēśvara（観自在）である、印度教の視を連想し易いが、Avalokita-svara（観世音）というのが古い本来の名称であると見るのが穏当のようである。観世音というのは一般に世間の音声を観ずるという意味だとされているが、これは羅什訳の法華経普門品に「聞＝是観世音菩薩、一心称」名、観世音菩薩、即時観＝其音声＝、皆得＝解脱＝」とある所から生じた解釈で、梵本や竺法護訳正法華経では菩薩の名号を聞き、或は受持すれば解脱を得るが故に観世音と名けるとあり、華厳経入法界品には「出＝微妙音＝而化＝度之＝」とあるので、この音 svara は菩薩の名号の微妙な音声を意味するようである。初期無量寿経では観音は蓋礎亘となっているが、これは Avalokitana の音を写したもののように思われる。寂天の大乗集菩薩学論に観察世間経 Avalokitana-sūtra という経典が引用されているが、これは Mahāvastu の中の釈尊の成道の伝承の記事の中に全文